

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふり 氏 がな 名	たけもと 竹本 あきら 晃
(研究テーマ名) 古代の都鄙間交通からみた万葉歌の解釈	
(研究活動実績) 上記の研究テーマに広く関連して、以下のような成果を得た。 [論文] 「雷岳の或本歌—皇子の殯宮—」(『万葉古代学研究年報』第 12 号、2014 年 3 月) [①] [講演] 「万葉集と古代史の接点」(柏原市立歴史資料館文化財講演会、2013 年 5 月) [②] 「巻 3 の 368～371 番歌」(奈良県立万葉文化館講座「万葉集をよむ」、2013 年 5 月) [③] 「近江から北陸への旅万葉」(奈良県立万葉文化館東京講座、2013 年 6 月) [④] 「泊瀬斎宮について」(奈良県立万葉文化館ボランティアの会「伊勢斎宮への道」、2013 年 11 月) [⑤] 「紀路のあらましと巨勢・五條周辺の万葉歌」(NPO 法人かなえ会「古道から学ぶ万葉集 紀路シリーズ」2014 年 2 月) [⑥] ①は、宮都およびその近辺では殯宮の造営ができないとみる通説に対する反論。挽歌論にふれつつ、遺構および万葉歌の再解釈から、宮都近辺にも営まれたと考えてよいことを指摘。②は、万葉歌から指摘されているような、伊勢斎宮と都との都鄙間における密使の可能性を、出土木簡から否定したもので、⑤ではその途次における泊瀬斎宮の前身を考えた。③④は、北陸道が、近江から、越前ではなく若狭に向かうという交通史の新説を受けて、万葉歌から同じことを証明した。⑥は、行幸などにおいて、都から目的地へ行くにあたり、その途次を地域ごとにわけて、遺跡の立地を加味しながら各地域の万葉歌の特質を説いたもの。 今年度は、講演に偏り、未執筆のものが多くを占めた。今後は、この未執筆のものを順次論文化していくことが課題である。次年度も採用されれば、『都市文化研究』に投稿したい。	